日本語教育通信

http://www.jpf.go.jp/j/learn_j/jedu_j/tsushin/tsushin-index.html

国際交流基金 | The Japan Foundation

1999年９月発行　ISSN 1343-2524

第35号

発行・編集　国際交流基金
日本語国際センター
編集協力　国際文化交流推進協会

漢字とかな

加藤　秀俊

日本の新聞は1860年ころからはじまっていますが、そのころの新聞をみると、漢字がすくなく、かな文字でかかれていたことがわかります。その理由のひとつは、漢字の活字をつくるのがたいへんだったからですが、なによりも日本人のおおくがむずかしい漢字をよむことができなかったからです。だから、そのころの新聞は、だれにでもわかりました。ところが、どういうわけか漢字をたくさんつかうのがえらいひとだ、というかんがえかたが政府の役人だの学者だののあいだにあったので、新聞もだんだん漢字をつかうようになってしまったのです。そういうふしぎな習慣がこれまでつづいて、いまの新聞はむかしにくらべると漢字だらけになりました。これら、たくさんの漢字を、はたしていまの日本人はぜんぶよむことができるのでしょうか？しらべてみると、そうではない、ということがわかっています。新聞をぜんぶただしくよむことのできるひとは10%にもならないでしょう。

よむことができないのだから、ましてや漢字をかくことなど、ふつうの日本人にはできません。このごろではワープロなどがありますから、漢字変換キーをおすだけで漢字はちゃんとでてきます。しかし、「でてくる」ということは、「かける」ということではありません。かくこともできない漢字をやたらにつかうのはおかしいとわたしはおもっています。

ただしい漢字をかく、ということは英語やフランス語などローマ字をつかっていることばで、ただしいスペリングでかく、ということとほぼおなじでしょう。ただしいスペリングができないのではこまります。日本人はたくさんむずかしい漢字をつかっている、といって感心するひとがいますが、ほんとうはじぶんたちのことばのただしいスペリングがわかっていないのです。わたしも、漢字がなかなかわかりません。わからないから辞書でしらべます。複雑な漢字をかこうとするときには虫眼鏡でしらべます。なぜ、こんなむずかしい漢字をつかわなければならないのか？とふしぎにおもうこともよくあります。

いったい、どうしたらいいのでしょう？わたしは、できるだけかなで文章をかき、漢字の数をできるだけへらしてゆくのがいい、とかんがえています。むかしの日本人は、かな文字だけで「万葉集」だの「源氏物語」だの、すばらしい作品をのこしているではありませんか。いまの日本はむかしにくらべると社会も複雑になっていますから、すべてかな文字、というわけにはゆきませんが、漢字の問題で時間やエネルギーをあんまり無駄にしないほうがいいとおもいます。

（国際交流基金日本語国際センター所長）